巻頭言

「帰国子女教育を考える会」に思う

小島　勝（龍谷大学文学部教授）

海外帰国子女教育問題が、日本の教育問題として取り上げられるようになってから、30 年になる。いわば青年期から壮年期へとさしかかっている。しかし、一時のブームは去り、「停滞」の声が聞かれる昨今である。「20 年前と少しも変っていない」と’“あきらめ”とも取れるような発言をする人もいる。

そうした中で、わが「帰国子女教育を考える会」は、藤澤皖会長のもとに営々と続けられている。初代の川端末人神戸大学名誉教授、第２代の坂田直三同志社国際高等学校校長をはじめ、幹事の皆様、会員の皆様の熱意とご努力のお陰で、年に３～４回の会合をもつに至っていることを、私白身大変ありがたいことと感謝している。しかしながら、社会的興味と関心を喚起した初期と異なって、海外帰国子女教育問題をとりまく環境を考える時、この会の行路に思いを馳せるのは、私一人ではないと考えて、この題をつけさせていただいた次第である。

この会ができて７年目を迎えているが、会則の「目的」には、「本会は、海外・帰国子女教育に関する情報交換を行う場としての機能を果すことを第一の目的とし、さらに、情報交換の結果、抽出された共通の問題点を分析し、考察することにより海外・帰国子女教育についての理論的・実践的な研究の進展に貢献することを目的とする」とうたわれている。「情報交換の場」、「共通の問題点を分析・考察」、「理論的・実践的進展に貢献」ということが、キーワードになっている。

当初より参加させていただいていた私は、この会の運営をめぐって、単なるサロン的な「情報交換の場」ではなくて、もっと行政にもの申す活動を考えるべきであるとか、もっと世間にアピールするような広報・宣伝活動を行なうべきであるとか種々の意見があったことを記憶する。しかし、この会の良さは、等しく海外帰国子女教育に関心をもつ親・教師・企業・研究者・行政が、忌憚なく意見交換をして、少なくとも自らの職場や家庭においてその成果を生かすことができることにあるとの合意があった。そして、坂田会長の時は、「異文化体験をはばむもの」・「異文化体験を促進する方策」を中心テーマとして、『異文化体験の促進のために一海外子女の異文化体験の現状・方策と提言』の冊子が刊行され、藤澤会長の今は、「異文化体験をどう生かすか」というテーマが柱になっている。

以下、私自身がこの会に対して考えていることを述べて、会員の皆様のご意見をうかがいたいと思う。まず第１に、海外での教育の問題から帰国後の問題へと中心テーマが移行しているので、帰国児童生徒と一般生徒の異文化間教育交流の実際を徹底的に追究してはどうだろうか。この会でプロジェクト・チームをつくることも一案であるし、研究会での発表者もそれを重点的にお願いすることも考えられる。この相互交流・相互啓発の実態を明らかにすることが、今最も求められていると思われる。その際、帰国子女のもつ「異文化」とともに一般生徒のもつ「異文化」にも着目して研究する必要がある。第２に、この会はあくまで「海外帰国子女教育」に焦点をおくことを目的としており、「外国人子女教育」や「留学生教育」、「国際理解教育」などへと範囲を拡大しないことを信条としていることには賛成であるが、かといって「海外帰国子女教育」とそれらとの接点をも否定するものであってはならず、今後はこれらの日本の教育の国際化と関連する領域にも関心を拡げるべきであると思われる。「海外帰国子女教育問題」は、これらと共通の鉱脈をもっており、その鉱脈を解明しない限り、「海外帰国子女教育問題」の改善も困難になると思われる。そして第３に、若い会員の参加を促すことを真剣に考える必要があるのではないか。児童生徒自身の生の声をもっと聞き、この問題に関心を持つ若い会員との意見交換によって、この会がさらに活性化することを真に望むものである。要するに、この会自体が、種々の意味での異文化間交流の広場になることが大切ではないだろうか。